高峰の恋、宗朝の恋

――「外科室」と「高野聖」との書かれない時間をめぐって――

市川祥子

泉鏡花「外科室」[1]（明28・6）の医師・高峰と「高野聖」[2]（明33・2）の旅僧・宗朝には同じ〔死灰の如く〕と描写される時間がある。手術のメスを下す直前の高峰が〔予〕の目に映る姿であり、東海道線に掛川から乗り合わせ静かに腰掛ける宗朝が〔私〕の目に映る姿である。二人にはまた、ある時間の長さを経た後という共通点が存在する。「外科室」における小石川植物園での出会いから手術までの九年間であり、「高野聖」における若き日の山中の弧家（ひとつや）での出会いから、それを間もなく〔私〕に語るまでの二十余年の間である。〔予〕と〔私〕とを語り手とする構造からの帰結であるが、両作ともにこの長い時間の心情は描かれない。彼らはここで生気のない枯れた、ひいては恋や情欲などの熱情を離れたと映る。しかしこの〔死灰の如く〕とは、見えない内面に渦巻く感情を抱え、それに沈潜している姿を外側から描写したものではないのか。そしてそれは、後に内面の感情が明らかになった時、その落差が激情を印象付ける効果を持つものではないのか。本稿では両者がここに至るまでの書かれない時間に想像を逞しくしてみたい。もう一つの共通点、女性との出会いの不確かさを鍵として。

「外科室」の（上）は手術の場面である。画家である〔予〕は〔好奇心の故に〕、友人高峰の執刀する貴船伯爵夫人の手術を見るため手術室に入った。既に室内に腰を掛けていた高峰は〔予〕と目が合った時〔唇辺に微笑を浮べ〕〔平然として冷か〕で、手術を待つ間も〔露ほどの感情をも動かし居らざるものの如く、虚心に平然たる状〕であった。しかし準備が整ったと告げる看護婦に応じた彼の声を、〔予〕は以下のように聞く。

「宜しい。」
と一言答へたる医学士の声は、此時少しく震（ふるひ）を帯びてぞ予が耳には達したる。其顔色は如何にしけむ、俄に少しく変りたり。
さては如何なる医学士も、驚破（すは）といふ場合に望みては、さすがに懸念のなからむやと、予は同情を表したりき。（上）
〔傍線は引用者、以下同様〕

〔予〕は高峰の声が震え顔色が変わったことを〔如何にしけむ〕と不審に思う。〔予〕の抱くこの不審は、読者にとっては解くべき謎として機能するはずである。この謎は続いて〔予〕の位置から、医師としての、〔驚破（すは）といふ場合〕の〔懸念〕であろうと解かれている。もちろんこれはこの時点での〔予〕の推測でしかない。ここで彼は高峰が夫人に対して特別な感情を有している可能性を一顧だにしていない。彼はこの時まだ、高峰が夫人に思いを寄せ、妻を持たないのもそれゆえであると気づいていないことになる。手術室に足を運んだのは純粋に画家としての、高貴で美しい婦人の大手術への好奇心からであった。「外科室」が〔予〕という語り手をもつことは、視点となる彼が画家であ

るとの設定がこの作品を特徴付ける鮮明な色彩表現に根拠を与えているとともに、提示される彼の感情を操作することによって読解の誘導を可能にしている。〔予〕が手術室での事件を伝える語りは、出来事の継起に沿い、目撃したその時々の感情を提示する位置からなされている。手術室での事件を目撃した〔予〕が、その発端として九年前の小石川植物園での出来事に思い至って回想し、高峰の夫人への思いを確認し、彼の自殺を告げて末尾の一文を寄せる。〔予〕の思考に沿って全てが明かされた後から考えれば、ここでの彼の同情の表明は陽動であったことが明らかである。陽動を置き迂回をさせてその答えに焦点を当てることを狙った謎、この時なぜ高峰は顔色を変えたのか、答えはまだ得られない。

夫人はすすめられた麻酔剤を断り、心の中に重大な、夫にも知られることの出来ない秘密があると明かす。

「そんなに強ひるなら仕方がない。私はね、心に一つ秘密がある。麻酔剤は譫言を謂ふと申すから、それが恐くつてなりません、何卒もう、眠らずにお療治が出来ないやうなら、もう〳〵快らんでも可い、よして下さい。」（上）

これを聞いた時の高峰の反応は書かれていない。夫人は決然として続ける。

「何も麻酔剤を嗅いだからつて、譫言を謂ふといふ、極つたことも無ささうぢやの。」

「否、このくらゐ思つて居れば、屹と謂ひますに違ひありません。」

「そんな、また、無理を謂ふ。」

「もう、御免下さいまし。」

投棄るが如く恁謂ひつゝ、伯爵夫人は寝返りして、横に背かむとしたりしが、病める身のまゝならで、歯を鳴らす音聞えたり。

ために顔の色の動かざる者は、唯彼の医学士一人あるのみ。渠は先刻に如何にしけむ、一度其平生を失せしが、今やまた自若となりたり。（上）

手術を前に高峰は一旦動揺し、夫人の言葉を聞いて平静を取り戻した。〔予〕は先刻の動揺を伝える当たってもう一度〔如何にしけむ〕という言葉を差し挟む。再び謎を含ませるこの言葉は、先に表した同情が的外れと明かしているようなものだが、巧拙はともかく、再度の謎の提示は高峰の動揺が、危険な手術を前にした医師としての緊張、という穏当な解釈を越える何ごとかのために引き起こされた、その内容を読み解くよう導いていよう。彼の動揺は夫人が麻酔を拒絶する以前から起こっており、対応を考えれば、麻酔なしで手術をする不安が動揺を招き成功する自信がそれを解消したとは解釈できない。夫人の手術に向かうことの何が高峰を動揺させたのだろう。全く接点の無い九年間の二人の恋が、徹底して各々の想念の中だけのドラマであることは既に様々に指摘されている。高峰は想念の中に作り上げられた夫人の観念が、生身の身体を眼にしそれに触れることで崩されることを恐れたのだろうか。[3] しかしそれだけでは、夫人の麻酔の拒絶、それに続く〔心に一つ秘密がある〕からの一連の言葉が高峰に平静を取り戻させたという、この部分の対応を説明することは出来ない。またそれでもなお、九年という時間は、出会いの衝撃が薄れて忘却されるのに、恋の悩みに疲れ倦んでしまうのに抗い続けるには、リアリティーを損なう長さとしてあるだろう。

夫人の言葉は何者かのことを、治療を諦め命と引き替えにしても構わないほど慕っていると伝えるものである。この時高峰はその相手が自分であると知っていたのだろうか。二人の接点は〔予〕が回想をする（下）に描かれる。おそらくはまだ未婚であったろう夫人と医学生であった高峰とは九年前に小石川植物園で出会っている。高峰と〔予〕

とが躑躅の咲き誇る丘に向かった時、御者を先頭にした華族の一群とすれ違う。夫人はその中の三人の女性の内、商人体の男の言葉を借りれば〔真中のに水際が立つて〕進んでいた。出会いの場面は以下の通りである。

中なる三人の婦人等は、一様に深張の涼傘を指翳して、裾捌の音最冴かに、する〳〵と練来れる、ト行違ひざま高峰は、思はず後を見返りたり。

「見たか。」

高峰は頷きぬ。「むゝ。」

恁て丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されど唯赤かりしのみ。（下）

出会いはこれだけのものであり、再会は手術室で、病のために動くこともままならず手術台に横たえられた夫人と、傍らに立ち彼女にメスを当てようとする高峰とが見つめ合った時である。先に見たように手術に立ち会った〔予〕が最初は高峰の夫人への特別な感情を知らないのだとすれば、この時に彼の受けた衝撃の本当の大きさは並んで歩く友人にも気取られることはなく、その後も語られることはなかった。〔躑躅は美なりしなり。されど唯赤かりしのみ〕とは、手術室での出来事を見終えた後からの〔予〕の詠嘆と捉えることができる。「外科室」は九年間の二人に恋文も密会も用意せず心情も語らせない。華族の令嬢である夫人は定められた結婚をして娘を生み、高峰は研鑽を積んで高名な医師となり、それぞれの時間を歩んでいる。この間二人は各々で何を思っていたのだろう。

出会いの場面はそれが一瞬であることを際立たせている。それは本当にすれ違っただけで、[4] 高峰が振り返った時にも周囲への遠慮のためか振り返ることのなかった夫人とは再び目を合わせることがなく、お互いの思いを確かめることはなかった。この不確かな一瞬の邂逅、にも関わらず二人の思いが接点のないまま九年間保たれ続けたことと手術室での矯激な行動は、そのままでは如何にも極端である。この点には人物造形が観念的であるという評価を下した上で、二人の出会いに運命、宿命という言葉を冠して辻褄を合わせ、表現された観念だけが俎上に乗せられてきた感がある。確かに全てを見終えた位置から振り返れば二人の出会いは運命のと呼ぶにふさわしく、それを受けての末尾の一文はこの恋愛を不道徳ゆえに断罪することを批判していよう。しかし思いが保たれた理由に、運命という人物の心理の外の超越的な結び付きや、二人に先験的に獲得され信じられている運命の出会いという観念を想定すること、また、リアリティーを犠牲にして作者が運命の出会いという観念を強引に描き出そうとしたと考えることが必要だろうか。

事態は逆ではないのか。邂逅が一瞬であることは、九年間思いを保たせ続けることを可能にしたのではなかったか。高峰は〔真の美〕と呼ぶ、躑躅も色褪せて見える夫人の気高さ美しさにその後の人生を決定付ける程の衝撃を受けた。華族の令嬢と高名な医師として両者が著名であるとの設定は、接点はなくともお互いに植物園での相手の名を知ることを可能にしている。夫人がその人を高峰であり執刀医であると知っていたのは明白であるし、夫人の素性は園外に停まった馬車の紋を見るだけでも知れたはずだ。夫人の面影は常に高峰の脳裏を離れない。まもなく彼はこの感情が恋と呼ぶべきものだと気づくだろう。それならば恋した男は次に何を望むのだろうか。華族の令嬢を奪って結婚を成し遂げることか。望みはそれ以前ではないのか。高峰は夫人の面影を追い続ける。しかし一瞬の邂逅は、夫人が自分をどのように思っているのかに答えを与えない。それを確かめるために彼は出会いの記憶に立ち戻る。彼に対する夫人の思いについて、一瞬の視線に彼が彼女に感じたのと等質な衝撃が読み取れるという最も望ましいものから、偶然に視線が交わったのみという絶望的なものまで、彼の組み立てる物語はこの二つの間を行きつ戻りつしたはずだ。定まらないま

まの始まりをめぐって、物語は組み立てられては壊される。出会いの答えが得られないために始まりは保留されて、それゆえに終わることのない煩悶である。この種の時間にとって九年間は長いものだろうか。高峰が優れた医師になるための日々を送った、その忙しい日常の裏面に彼が物語を組み立てる時間を想定することが出来るのではないだろうか。忙しい日常は恋の煩悶を深層へ追いやるが、それは間隙を衝いて頭を擡げ彼を捕らえる。夫人の姿を思い起こす煩悶の時間は決して厭わしいばかりのものではあるまい。もしも出会いにお互いに確信があるとしたら、カタストロフィはもっと速やかにおとずれただろう。運命の出会いを信じ婚姻制度に妨げられて女性が得られないことに苦悩し続ける時間と、出会いの時をめぐって物語を作っては壊すことを繰り返す時間、九年という長さにリアリティーを与えるのは後者である。親の定めた結婚をして家庭を営んでいたであろう夫人にとっても事情は同じであって、不足のない日常の裏面に、衝撃を受けた植物園での出会いの記憶に立ち戻る時間はあったはずである。そうした出会いを欠いた女性の日常については、すぐ後に「化銀杏」[5]（明29・2）のお貞の抱えた悩みとして扱われる。親類の決めた結婚をしたお貞は〔御婚礼をした時分は、嬉しくもなく、恐くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかつた〕。唯一の肉親の祖父を喪ってからは泣いて部屋に籠もっていたが、娘が出来ると〔もう其しく〳〵泣いてばかり居る癖はなくなツて、小児（こども）にばかり気を取られて、他に何にも考へることも、思ふこともなくツて〕暮らしていた。彼女はこの後娘を亡くし、芳之助という青年が現れることで精神を破綻させていくのだが、「外科室」における夫人の日々をここに見ることが出来る。日常の関心の大半を占めていた娘を、その裏面を噴出させようとする手術室の場に入れることは出来なかったのである。

このように考える時、手術室で夫人が秘して慕う人がいると告白するのを聞いて、高峰がそれをすぐさま自分だと理解するはずはないのだ。唯一と定めている女性が、慕う相手を命を賭して秘したいと望むことを知った時、彼が考え得たのは、何を棄ててもその望みを叶えようということではなかっただろうか。謎を置いて読者の関心を引きつける点、秘密を提示して（上）から（下）への推進力とする点など「外科室」には探偵小説的手法が散見するが、鏡花の探偵小説「活人形」[6]（明26・5）には以下の場面がある。毒を飲まされて病院に駆け込んだ次三郎は言う、〔到底（とても）私は助りませんのですから、何卒（どうぞ）思つてることを言はして下さいまし。明日まで生延びて言はずに死ぬよりは、今お話申して此処で死ぬ方が勝手でございます〕。ここでは延命のために話すことを制止する医師の義務と事情を聞く探偵の職掌とが対立させられた上で、病人の意に任せよという探偵の主張を通している。話すことと秘すること、方向は逆であるが、死と引き替えに何ごとかを望んだ時、医師としての義務は劣位に置かれるという発想が既に見られる。「外科室」の高峰は、夫人の何も語らずに死ぬという望みを理解した。それならば彼はこの時点で、むしろ手術が失敗し得ることを受け入れたのである。手術に失敗し結果的に夫人を殺すことになるはずの彼は、自死を覚悟したとも言えるだろう。手術の一刻を争う程重篤な夫人は手術をしなければ死の時は近い。麻酔を用いずに手術をすれば看護婦や臨検の医師が恐れるように手術の成功は期待できない。麻酔を嗅ぐことは彼女にとって死を意味する。この時、彼女の目前の死は逃れられないものであった。高峰は慕う女性の望みを叶え、その死に自らの死を以て関与することを選んだのである。「義血侠血」[7]（明27・11）の白糸が学資の援助を受け入れた欣弥に求めた言葉を借りれば〔他人ではなく〕、彼女にとっての何者かになること、その安堵が彼に平静を取り戻させたと考えるべきだろう。

続いて夫人の口から〔刀を取る先生は、高峰様だろうね！〕〔さ、殺されても痛かあない〕という言葉を聞き、高峰は〔軽く身を起して〕〔足音軽く歩を移して〕手術台に向かう。夫人が高峰の名を知ることはこの時初めて彼に伝わったはずだが、彼の医者としての名声と厳格な性格は、なおそこに夫人の特別な感情を読みとることを阻んでいる

ようだ。彼は感情を動かされない。そして手術が始まりメスが彼女の胸を切り裂いた時、夫人は言った。

「痛みますか。」
「否、貴下だから、貴下だから。」
恁言懸けて伯爵夫人は、がつくりと仰向きつゝ、凄冷極り無き最後の眼に、国手をぢつと瞻りて、
「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」
謂ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳の下深く掻切りぬ。医学士は真蒼になりて戦きつゝ、
「忘れません。」　（上）

夫人は秘した相手が高峰であることを告げて、自らの手を添えメスを胸に深く突き刺す。胸に病を抱えたのは心を乱す恋の煩悶のゆえとまで考えても良いのかもしれない。彼女は目前にある逃れられない死に高峰への思いが紛れてしまうことを惜しみ、死を自らの手で幾ばくか早めることで、それを自らの思いに供した。夫への罪悪感、華族としての世間体、高峰の名声を傷付け地位を脅かす醜聞、そして、彼が自分を記憶していないことへの怖れ、死と引き替えにそれらを押して彼女は相手に思いを打ち明けた。彼女の高揚は計り知れない。この時高峰は〔真蒼になりて戦〕く。彼がこの行動を予期していなかったことは言うまでもない。自らの手で胸を刺すという夫人の行動は驚愕に値する。女性の白い皮膚を金属製のメスが突き刺し深紅の血が流されるこの光景に性交の象徴を読み取るのは妥当であろうし、それが女性から男性に挑む形でなされていることにも注意すべきである。しかし、高峰の心のドラマはそれ以前、夫人にその行動を起こさせた心理にこそ関わるのではないだろうか。夫人は〔貴下だから〕と繰り返す。高峰はこの時はじめて夫人の慕う相手が自分であると知った。彼の煩悶の答えは最も望ましい形で目の前に現れた。〔貴下は、私を知りますまい！〕、私はあなたを知っていると告げ、あなたは私を知っているのかと問うこの言葉に、〔忘れません〕、忘れていませんと時間の継続を含意して答える呼応は、出会いの不確かさに発して費やされた九年間の二人の時間が等質であったことを確認し合うものである。夫人は小石川植物園での一瞬の邂逅に彼と同じく衝撃を受け、同様の時間を過ごしていたのだ。同時に夫人は自殺した。長い時間の煩悶に最も望ましい答えが与えられるのと、相手に再会して見つめ合い思いを交わし合うのと、あなたのためなら死んでも良いと告げられ実際にその手で死を選ばれるのと、象徴的な性交を果たすのと、恋愛の頂点は一時に彼におとずれる。医者としての倫理観と、思い合う相手を次の世に追いたいという願いと、何よりも恋愛の成就した圧倒的な絶頂感をその高みのままに留めたいという思いは、高峰に死を選ばせるのに十分であったろう。高峰から〔忘れません〕の言葉を引き出し、夫人にとっても九年の時間に最も望ましい結論が与えられた。

こうした二人の恋愛に運命、宿命の言葉を冠することは可能であり、そこに作者の託した恋愛至上の観念を読み取ることは出来ようが、人物に即してみればただ圧倒的な出会いに翻弄された時間があっただけである。

「高野聖」において、宗朝が雪の降り積もる敦賀の今は店を仕舞った旅籠屋で、枕を並べた若者〔私〕の求めに応じて語ったのは、自身の若き日の体験、真夏の日照りに悩まされての飛騨の山越えであった。

飛騨の高山から信州の松本へ抜ける〔天生峠〕で薬売りを追って久しく使われない旧道に入った宗朝は、途中道にのたくる蛇と森に降る蛭との試練に遭いつつ、ようやく山中の孤家に辿り着いた。そこには二十二、三歳で脚の立たない〔白痴〕の男と小造りの美しく優しげな婦人、雑用を手伝うらしい親仁とがいた。宗朝が泊まることを許した婦人は彼を裏の崖を下った谷川へと誘う。婦人は二の腕に水を掛けて慎ましく身体を洗っていた宗朝に裸で川に入ることを勧め、着物を剝

ぎ取る。さらに恥じて縮こまる彼の後ろにまわって、蛭に咬まれて疼く身体に水を掛けてはさすってくれる。

其の心地の得もいはれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うと〳〵する様子で、疵の痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひたと附ついて居る婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれたやうな工合。

山家の者には肖合はぬ、都にも希な器量はいふに及ばぬが弱々しさうな風采ぢや、背中を流す中にもはツ〳〵と内証で呼吸がはずむから、最う断らう〳〵と思ひながら、例の恍惚で、気はつきながら洗はした。（十五）

さあ、然うやつて何時の間にやら現とも無しに、恁う、其の不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被つたから吃驚、石に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思ふ途端に、女の手が背後から肩越しに胸をおさへたので確りつかまつた。

（貴僧、お傍に居て汗臭うはござんせぬかい、飛んだ暑がりなんでございますから、恁うやつて居りましても恁麼でございますよ。）といふ胸にある手を取つたのを、慌てて放して棒のやうに立つた。

（失礼、）

（いゝえ誰も見て居りはしませんよ。）と澄して言ふ、婦人も何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のやうに露して居たのぢや。

何と驚くまいことか。（十五）

彼は心地のよさに〔恍惚〕として足を滑らせ水に落ちかけ、既に着物を脱いでいた婦人に抱き留められる。彼女が魔力を持つのならば〔恍惚〕はそのためであり、そのまま続いていれば彼は女の身体に手を伸ばし、薬売り同様動物の姿に変えられていたのだろう。しかし身に備わった教えのためか偶然かこの時宗朝は我に返っている。婦人はさらに身体に触れさせようと誘うが、恥ずかしさからか手を引っ込める。この時の宗朝には婦人の身体に寄り添われて痛みもなくなり、花びらの中に包まれたような感触で心地よい香りと暖かさに浸っている恍惚感の記憶が残されただろう。

この至福の時間が彼に修行を投げ出し婦人のもとに留まって生涯を送りたいとまで思わせる。翌朝孤家を辞して山を下りる道で宗朝はこの水浴の時を思い出した。〔女夫滝〕と呼ばれる厳にせかれて男滝、女滝の二筋に分かれて落ちる光景を目にして、昨日の谷川での出来事に思いを馳せ、男に縋り付く女の姿態を連想し、婦人の肢体の記憶をありありと蘇らせる。道すがら頭をもたげていた孤家へ引き返そうという思いはこの回想によって抜き差しならないものとなった。

其手と手を取交すには及ばずとも、傍につき添つて、朝夕の話対手、［中略］それから谷川で二人して、其時の婦人が裸体になつて私が背中へ呼吸が通つて、微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、其まゝ命が失せても可い！

滝の水を見るにつけても耐へ難いのは其事であつた、いや、冷汗が流れますて。（二十四）

男滝の方はうらはらで、石を砕き、地を貫く勢、堂々たる有様ぢや、之が二つ件の厳に当つて左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸みて、女滝の心を砕く姿は、男の膝に取ついて美女が泣いて身を震はすやうで、岸に居てさへ体がわなゝく、肉が跳る。況して此の水上は、昨日孤家の婦人と水を浴びた処と思ふと、気の所為か其の女滝の中に絵のやうな彼の婦人の姿が歴々、と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思ふと又浮いて、千筋に乱るゝ水とともに其の膚が粉に砕けて、花片が散込むやうな。あなやと思

ふと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足も全き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱツと刻まれ、あツと見る間に又あらはれる。私は耐らず真逆に滝の中へ飛込んで、女滝を確と抱いたとまで思つた。（二十五）

彼が女夫滝の光景から妄想に囚われるのは無理もない。この滝は水浴をした谷川の下流にあたり、また後に語られるように婦人の魔力はさらなる上流の滝からの洪水によって得られたのであって、その〔男を誘ふ怪しの水〕が彼女の力の源なのである。宗朝が眼下の女夫滝の流れから川を遡った水浴の場所を思い出したとも、怪しの水が婦人の魔力を帯びて彼を誘い続けているとも考えてよい。

ここで注意したいのは、水浴そのものを語った部分とそれを思い出す時を語った部分とでは印象が大きく異なることである。先の水浴の場面では、宗朝は婦人の与える恍惚感に浸ると同時に、思いも掛けない彼女の行動や感覚に驚き、当惑し、惑溺することに抗おうとした。そのために恍惚感からはすぐに引き戻されてしまった。束の間の至福も〔うと〳〵〕〔恍惚〕と表現される穏やかなものだ。対してそれを思い出すこの部分では、はじめこそ〔微妙な薫の花びらに暖に包まれ〕という昨日の感覚をなぞったものだが、次第に女滝の流れに婦人の白い裸体が重ねられ、それが揉まれ揺られて捩れ、沈んで浮いて散って結んでと映り、ついには自身が滝に飛び込んでその姿に抱きついたとまで感じる、肉感的、官能的なものである。〔宗朝の語りの特徴は、その視点が「語る宗朝」と「語られる宗朝」の間を自由自在に流動する点にある〕、〔水浴の場では、「語る宗朝」の立場をほぼ放棄して、「語られる宗朝」の朦朧とした意識をそのままに反映した朦朧とした語り口で語っている〕[8]との指摘があるように、若き日の体験を語る宗朝が語られている自分に同化し、また、離れること、時によってあたかも物語の中に存在するかのような印象を与えることは「高野聖」の語りの特色と言えようが、その宗朝が「語られる宗朝」に同化する度合いは〔其まゝ命が失せても可い！〕とし、〔女滝の中に絵のやうな彼の婦人の姿が歴々、……もとの顔も、胸も、乳も、手足も全き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱツと刻まれ、あツと見る間に又あらはれる〕とたたみかけるこの部分において甚だしい。これを布団にくるまって語っている宗朝の姿を思い浮かべれば、その放埒さは見苦しい程である。水浴の時間が至福であったことに違いはないのだが、それを思い出す時間はそれにも増して惑溺を許す、悦楽に満ちたものであることを示している。宗朝の身を焦がす、命を賭けても構わないとまでのエロチックな情念は思い出すことによって醸成されているのである。

「高野聖」の語りが入れ子型の構造になっていることはかねて指摘されている通りである。宗朝が若き日の山越えの話を〔私〕に聞かせるという枠を持つことは、体験からそれが語られるまでに経過した時間を問うことを可能にする。彼は〔私〕に語るこの時〔宗門名誉の説教師で、六明寺の宗朝といふ大和尚〕という人物である。彼はそれまでの二十余年をどのように過ごしたのだろうか。この月日について、滝を前にして彼が味わった思い出す時間の悦楽は何ごとかを教えていないだろうか。

思い出すことに浸る時間は、諏訪湖で馬を売った帰途の親仁に見つかってすぐに断たれてしまった。親仁は宗朝の心を見透かしておりそれを嘲笑うかのように婦人の正体を告げ、不幸な人を手助けするために引き返すのだと自分に言い聞かせている彼の欺瞞を衝く。婦人は魔力を持ち、生来色を好み、迷い込んだ若い男を次々に誘惑しては飽きると獣の姿に変えているという。夜、孤家を取り巻いていた鳥、獣、魔物は全てそうして姿を変えられた男達で、売られた馬は先に孤家に着いていた薬売りらしい。

地体並のものならば、嬢様の手が触つて那の水を振舞はれて、今まで人間で居よう筈はない。

牛か馬か、猿か、蟇か、蝙蝠か、何にせい飛んだか跳ねたかせ

ねばならぬ。谷川から上つて来さしつた時、手足も顔も人ぢやから、おらあ魂消た位、お前様それでも感心に志が堅固ぢやから助かつたやうなものよ。　（二十五）

彼の白痴殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換にやあ、嬢様は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて獣にするわ、殊に其の洪水以来、山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘ふ怪しの水、生命を取られぬものはないのぢや。　（二十六）

この親仁の言葉を聞いた時、宗朝は婦人が魔力を持つことに驚き、獣に変えられかねなかったと怖れ、色欲に囚われ人間を獣に変える罪業を重ねる彼女を浅ましいとも哀れとも思ったはずだ。そして、そんな婦人が自分を無事発たせてくれたことに恩寵を感じただろう。だからこそそのまま山を下りたのである。

それでは里に戻って修行を続けた宗朝にとって、婦人との出来事は、魔界から逃れられた安堵と助けられた恩寵とを胸に、若者に話をねだられるまで振り返られなかったものだろうか。そうでなくとも過去の特異な体験として懐かしく思い出すもの、思い出す彼の心に動揺を与えない解決済みの記憶となっていたのだろうか。

宗朝の聞いた親仁の話は語りの入れ子型の構造の一番内枠にあたる。ここでは婦人の正体や心情について彼女自身からは確定的なことは何も語られず、親仁の語りによってのみ知らされていることに注意したい。通りすがりの百姓からも語られた十三年前の洪水は確かなことであろうが、その他は親仁の話を信じればという保留付きで宗朝に伝えられているに過ぎないのだ。親仁の話を聞いた時、宗朝は婦人が魔物かもしれないことに愕然としただろう。しかし直前まで引き返して女とともに暮らそうと思い詰めていた男にとって、真の衝撃は、心優しい女の無条件の好意と信じられていたものが、自分を欲情させんがための手練手管であったのかもしれないと知ったことではないだろうか。水浴の時、婦人は優しく背中をさすり溢れる慈愛で彼を包み込んだ。孤家に戻ってからも山中に寂しく暮らす身の不幸を嘆きここに留まれと訴え続けた。婦人は彼女を慕って近づく獣を〔お客様があるよ〕と追い払う。この言葉は客がなければ相手をすると告げる、彼らの密接な繋がりを示すものだが、宗朝は不思議な感じを受けてはいるものの性的な関係を想定して両者を結びつけることは出来なかった。床の上で彼が一心不乱に唱える陀羅尼は、孤家を囲繞する獣を撃退するためのもの、その邪気に苦しめられる婦人を救うためのもの、彼女の言葉や美しさ優しさに魅了され、邪気に包まれて起こりかねない自らの欲望を戒めるためのものである。それが結果として彼女の魔力から身を守ることになったとしても、彼にとってこの時の婦人は邪念を持って自分を籠絡せんと近づいて来る存在ではなかった。翌朝の別れに至るまで婦人の好意はあくまで純粋なそれとして宗朝に受け取られていたはずであり、それゆえ孤家に引き返そうという思いも起こったのである。しかし親仁の話はそれを覆した。夫を甲斐甲斐しく世話する婦人に宗朝が涙を流すと、彼女は〔（貴僧は真個にお優しい。）といつて、得も謂はれぬ色を目に湛へて、ぢつと見〕るが、これは彼の真心に感じ入ってのものなのか、何とも純情な珍しい男に食指を動かされてのものなのか。婦人が魔力を持つとして、その正体を知られまいと獣を退けたのは宗朝への好意から自分の身を恥じたのか、正体に気づいて若い男が逃げ出すことを嫌ったのか。谷川から人の姿のままで戻って来られたのは、宗朝への格別な好意のためなのか、道心堅固で欲望を抑えた男には魔力が届かなかったのか。そもそも彼女は魔力を持っているのだろうか。親仁の話は婦人の正体を告げたと同時に、こうした疑問を宗朝に突き付けるものであった。[3] 宗朝に託された作者の思いについては三島由紀夫の以下の解釈がよく知られている。

そして作者の本音としては、かういふ勝気でやさしく、「薄紅ゐの汗」もしたたりさうな無上の肉体の美をそなへた女に、生命と人

間性の危機を孕んだ愛し方で愛してもらひ、しかも自分だけの特権として、格別の恩寵によつて、命を救はれて帰還したいのである。〔中略〕彼が助かるのは、しかし、自分の努力や戦ひの成果としてではない。他ならぬ対象の、清らかで魔的な美女が、自分にだけ向けてくれた例外的なやさしさのおかげで助かるのだ。愛されるといふのはこのやうなことであり、その愛のおかげで堕罪を免れることなのだ。[10]

自分だけの特権として、自分にだけ向けられた例外的なやさしさのおかげでと望む心は、同時に好ましい女性から格別の恩寵が与えられないことに常に脅える心でもあるはずだ。宗朝にとって親仁の話は婦人の自分に対する格別な好意への信頼を揺るがすものである。しかしそれ以外に彼女の心情を知る手だてはなく、〔嬢様別してのお情〕があったのかは不確かなまま残される。

然もうまれつきの色好み、殊に又若いのが好ぢやで、何か御坊にいうたであらうが、其を実（まこと）とした処で、軈（やが）て飽かれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、忽ち形が変ずるばかりぢや。（二十六）

彼女の心情の答えは親仁のこの言葉をどれ程信頼するかによって定まってくるものだろう。しかしその解釈は読者に委ねられる以前に、作品内の宗朝にこそ委ねられた問題であった。

里に戻った後、宗朝は滝の前でそうしたように谷川での出来事を官能を伴って思い出す。しかし、婦人は彼の性欲を利用するためだけに近づいてきたのかもしれない。思い出す時間が限りない悦楽を与える手放し難いものであり、格別な好意を与えられた可能性が少しでもある以上、宗朝は婦人の僅かな素振りや些細な言葉の端々を記憶の中から掻き集めて、その正体と心情とに望ましい答えを探り続けたのではなかったか。それらは伝聞でしか知らされなかったためにどれだけ思い出しても答えは得られず、仮説は常に振り出しに戻る。婦人との関係は始まっておらず、それゆえ終わることもない。自分に格別の好意を持っていたという最も望ましい物語に浸る時から、若い男になら誰にでも同じように接するのだという物語に慄然とする時まで、彼は恍惚感と絶望感との往復を繰り返した。記憶は常に呼び起こされ、古びることも忘れ去られることもない。二十余年を経て語る時になお語られる自分に同化するほど生々しい。宗朝は寝る時に衣服を着たまま円くなって俯き形に布団を被る。作中で彼が同じく円くなって背後から暖かいものに被われる姿勢を取るのは、弧家での水浴の場面で婦人に背中を流されている時である。宗朝は語りの時まで諸国を行脚し修行に励んだろう、その日々の裏面に婦人との出来事を反芻し続ける煩悶の時間はあった。〔私〕に語り終えた今、煩悶に答えは得られたのだろうか。彼の婦人への恐れは、肉欲を愛情から峻別する生硬な観念に発していたはずだが、それと折り合いはついたのだろうか。〔私〕は敦賀の宿での翌朝、旅立つ宗朝を〔ちら〳〵と雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである〕とし、そこに聖性を見て取る。永平寺へと向かう宗朝の行く手には孤家の女性の形象という点で「高野聖」の原型とされる「白鬼女物語」の舞台春日峠があり、永平寺を越え白山をまわった先には実際の天生峠、さらに高山を過ぎれば〔天生峠〕と想定された場所に行き着く。宗朝が答えを得て婦人の元へ戻って行ったと考えたい思いにも駆られるが、それは深読みに過ぎようか。そうでなくとも、忘れ去ることなく、もしくは忘れ去ることが出来ず、社会的な栄達を遂げた日々の裏面に婦人に纏わる煩悶を抱え続けた二十余年の時間を生き続けてきたことは、〔私〕の目に聖性を帯びて映ったのではないだろうか。

少年期に母親を亡くしたことが、泉鏡花の作品の生成に圧倒的な影響を及ぼしているのは論をまたない。彼は母を、母も彼を愛しただろ

うが、幼い少年がその存在を真にかけがえのないものと気づいたのはそれを亡くした後であったろう。愛された記憶も疎まれた記憶も、また、例えばその命と引き替えにこの世に残した他の兄弟の方が自分より愛されたのかもしれないという恐れも、母を喪った後から構成される。しかしその時には、彼女が如何に自分を愛してくれていたかの答えは得られようもない。この作家が生涯、母に、その面影を宿す女性に男が愛される物語を反復して綴り続けたのであってみれば、初期に描かれた二人の男の過ごしたこうした時間が、彼にとって切実な問題をはらんだものと考えることが出来る。語り手はその時間を理解するものとして求められたのではないだろうか。

注

（1）「外科室」（一八九五（＝明28）・六『文芸倶楽部』第六編）

（2）「高野聖」（一九〇〇（＝明33）・二『新小説』第五年第三巻）

（3）鈴木啓子「溢れでる身体、そして言葉―泉鏡花「外科室」試論―」（一九九八・五『日本近代文学』第五八集）参照。この論では「外科室」に高峰の観念が婦人の身体によって崩壊するドラマを読み取る。

（4）種田和加子「偶像の逆襲―泉鏡花「外科室」の問題性―」（二〇〇〇・七『藤女子大学 国文学雑誌』第六四号）参照。手術室の場面に高峰と夫人との言葉の抗争を読みとるこの論では、九年前の出会いの時に二人が見つめ合ったという慣用的な読解に疑問を呈している。

（5）「化銀杏」（一八九六（＝明29）・二『文芸倶楽部』第二巻第二編）

（6）「活人形」（一八九三（＝明26）・五　春陽堂）

（7）「義血侠血」（一八九四（＝明27）・一一『読売新聞』）

（8）鈴木啓子「泉鏡花「高野聖」論―その語りをめぐって―」（一九八九・三『お茶の水女子大学人文科学紀要』第四二号）

（9）赤間亜生「「高野聖」論―『沈黙』の物語―」（一九九三・五『日本近代文学』第四八集）参照。この論では親仁の語りを〔〈本当に女が魔神なのか〉という問いを誘発する〕、〔女の謎を喚起しつづけてやまない〕ものと指摘する。

（10）三島由紀夫『日本の文学4　尾崎紅葉・泉鏡花』「解説」（一九六九・一　中央公論社）

※〔　〕は引用を示す。泉鏡花の作品の引用は岩波書店版『鏡花全集』により、漢字を新字体に改めルビを最小限に留めた。